〈　配　点　〉

一　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　各２点×８＝16点

二　　　　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　問六⑵　６点

他　各３点×９＝27点

（問四　は完答・順不同可）

（問五　問八　は完答）

三　　　　　　　　　　　　　　 問一・問二　各６点×２＝12点

他　各３点×７＝21点

四　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　各３点×６＝18点

（問五　は完答）

〈　解　説　〉

一　漢字の読み書き

⑴　「哀れ」は、かわいそうな状態のこと。「哀」の音読みは「アイ」で「」などの熟語がある。

⑵　「迎」の訓読みは「むか（える）」。「」「」などの熟語がある。「歓」には喜ぶという意味がある。

⑶　「撃」の訓読みは「う（つ）」。「」「」などの熟語がある。

⑷　「弁」には話すという意味がある。「弁解」「熱弁」などの熟語がある。

⑸　「誓」の訓読みは「ちか（う）」。「宣誓」は、大勢の前で誓いの言葉を述べること。

⑹　「卑屈」は、いじけて、必要以上に自分のことをばかにすること。

⑺　「架」の訓読みには、「か（かる）」のほかに「か（ける）」もある。音読みは「カ」。「橋を架ける」という意味の「」などの熟語がある。

⑻　「硫黄」は特別な読み方。「硫」の音読みは「リュウ」で「」などの熟語がある。「黄」の訓読みは「き」「こ」、音読みは「オウ」「コウ」。「」などの熟語がある。

二　論説文の読解

《出典》『的進化論　１％の奇跡がヒトを作った』（新潮社　二〇一六年）による。

　　著者は分子古生物学者。一九六一年生まれ。化石中に存在するタンパク質やＤＮＡの、約五億年前のカンブリア紀における動物の多様化の研究などをおこなっている。主な著書に『「性」の進化論講義』、『未来の進化論』、『若い読者にる美しい生物学講義』などがある。

＊問題作成の都合上、文章を一部改変したところがある。

**問一**　に「にすんでいる」「を見つけたり空気を呼吸したりするときに、とても役に立った」という表現があることに着目する。「浅瀬」、つまり、川や海などの水の浅いところにいて、獲物を見つける・空気を呼吸するというのだから、水の中から顔を出すということが書かれていることになる。【ア】は直前でのことが書かれているので獲物を見つけることには関係があるが、呼吸とはつながらないので、合わない。【イ】は前後で書かれているのは骨の話であり、この時点では骨と水の中から顔を出すこととの関係はわからないので、合わない。【ウ】は「立てせ」について書かれているが、【イ】と同様にこの時点では「腕立て伏せ」と水の中から顔を出すこととの関係がわからないので、合わない。【エ】は「腕立て伏せ」ができることで「水面から顔を出すことができる」ようになることが述べられたところなので、ちょうどつながる。【オ】は空気呼吸そのものの話をしているので、それについて「空気を呼吸したりするときに、とても役に立った」というのはつながりがおかしいので、合わない。【カ】は「あまり速く動くことはできなかった」という話なので、「獲物を見つけたり空気を呼吸したり」という話題とは外れており、合わない。

**問二**　ａ　は、直後で「……の骨の形が動物の骨に似ている」とあるので、本文からエウステノプテロンの体の中で四肢動物の骨に似ていると書かれているものをさがす。すると、「エウステノプテロンの胸ビレと腹ビレ」にある骨の形が四肢動物の骨に似ていると述べられている部分が見つかる。　ｂ　は、「ハイギョ」として述べた部分なので、本文から同様にハイギョと比較しているところをさがすと、ハイギョよりも「四肢動物の肢の骨のパターンである『一本、二本、手首の骨、指の骨』」に近いと述べられている部分が見つかる。　ｃ　は、ここまでの内容から導かれる結論であり、「エウステノプテロンが陸上に上がれるといされた」理由を直接述べたところである。本文で確認すると「エウステノプテロンは、腕（あるいは）を持つ魚だったのだ」と述べたあとで、それを理由として「陸上で生活していたと勘違いされても無理はない」とまとめている。

**問三**　「つけねに一つ、その先に　Ａ　つの骨」について、次の段落で「一本、二本、手首の骨、指の骨」とあり、ハイギョでは「一本」だけだったが、エウステノプテロンでは、「一本、二本」まであったと述べられている。「つけねに一つ」が「一本」に、「その先に　Ａ　つの骨」が「二本」に対応しているので、　Ａ　には「二」が当てはまると考えられる。二つめの　Ａ　も、ハイギョでは「一本、二本」の最初の「一本」、つまり一つめだけがあったが、エウステノプテロンでは「一本、二本」という二つめまでがあったということなので、やはり「二」が当てはまることになる。

**問四**　**ア**は「デボン紀後期にすんでいた生物のこと」が合わない。イクチオステガやアカントステガは確かにデボン紀後期に生きていた両生類だが、カエルは現代で生きている両生類である。**イ**は本文の「両生類は、進化史上最初の、そして完全な四肢動物だ」という内容としている。**ウ**は「水中だけでも陸上だけでも生活できる」が合わない。本文では、「陸上で生活はできるものの、あまり水辺かられることはできない。卵は水中に産むし、生まれてからも幼生の時期は水中で生活する」などと述べられている。**エ**は「肺をもっていない生物のこと」が合わない。確かに肺をもっていない両生類としてハコネサンショウウオが挙げられているが、「肺は補助的な役割をしているだけだ」とあることから、基本的に両生類には肺があるということがわかる。**オ**は本文の「両生類は、完全に水中で生活しているわけでもないし、また完全に陸上で生活しているわけでもない。水中と陸上という両方のが必要な生物なので、両生類というわけである」と一致している。

**問五**　Ｂ　は、直前では「幼生の時期は水中で生活する」と子供のころは水中での生活が中心であることが述べられているのに対して、直後では「大人になると、たいていエラはなくなって、空気呼吸をするようになる」と大人になってからは陸上での生活が中心になることが述べられているので、対照的な内容をつなぐときのカ「しかし」が当てはまる。　Ｃ　は、直前で「とても重たかったにいない」とイクチオステガの体が重いことを示したうえで、直後では「あまり速く動くことはできなかっただろう」という、前の「重かった」という内容から当然のように導かれる結果を述べているので、**オ**「したがって」が当てはまる。

**問六**⑴直後から二つの「仮説」をしたあとで、「でも、なんだか変な話だ」と評価している。そのあと、具体的には二つめの仮説について「変な」ところを説明しているが、同じ理由で一つめの仮説も「変」と考えることができる。

⑵　直後から具体的に説明されている。肢がある大人は者かられることができるが、肢がまだない子供はそれができず、捕食者に食べられてしまうことになる。それでは意味がないのではないかというである。直接は書かれていないものの、一つめの仮説にも同様のことが言える。上がった池から別に池に移れるのは大人だけであり、子供はそれができない。つまり、これらの仮説のような目的で肢が進化したのなら子供にも肢があった方がいいはずであり、しかし実際にはそうなっていないので、仮説はおかしいのではないかということである。

**問七**直後に「る」とあるので、　Ｄ　には、元いた場所が当てはまる。具体的には「池」になるが、これはあくまでたとえの一つであり、川でも湖でも同じことなので、すべてをまとめた「水」が、直前の「水から出るためではなく」とも対応するため最も適切である。

**問八**　ａ　は、エウステノプテロンについて、「体の形」と並んでいるものである。本文では、「体が流線型であること、眼が横についていること」と並んで、それらを理由に「完全に水中に生息していたと考えられている」と述べられている。　ｂ　は、アカントステガについて、大きなビレと並んで水中で生活していたと考えられる理由になるものである。本文では、大きな尾ビレは陸上を歩くのに適さないことを説明したあとで、「骨格の形から見て、アカントステガはエラも持っていたと考えられるのだ」と述べている。

**問九**　前の部分の「魚は陸に上がるために肢を進化させたのだと、かつては考えられていた……肢は、陸上を歩くためにあるのだから」という部分と、「肢は　Ｅ　進化したわけではないのかもしれない」が対応していることに着目する。「かつては」肢は「陸に上がるため」「陸上を歩くため」に進化したと考えられていたが、仮説がおかしいと感じられることや、「進化史上最初」の肢のある生き物たちが完全に水中にすんでいたとされることから、「ひょっとして」それは間違いではないかと考えられるようになったということである。したがって、**イ**「歩くために」が適切。

三　小説文の読解

《出典》『空より高く』（中央公論新社　二〇一二年）による。

　　著者は小説家。一九六三年生まれ。一九九九年『ナイフ』で文学賞、『エイジ』で賞、二〇〇一年『ビタミンＦ』で賞、二〇一〇年『』で文学賞を受賞。主な著書に『流星ワゴン』、『』、『カシオペアので』などがある。

＊問題作成の都合上、文章を一部改変したところがある。

**問一**　あとに続く言葉が「……にかぎって、にこやかに笑う顔が……」であることに注目する。ここでの「……にかぎって」は、「楽しみにしていた外出の日にかぎって雨が降る」のように、それが起こることが望ましくないときや適切とは言えないときに、ちょうどそれが起こる場合に用いる表現である。したがって、この「こういうとき」は、「にこやかに笑う顔」がかぶことが適切ではないときということになる。このときの話題は、交通事故であり、母から「か心当たりない？」と聞かれてドカの顔が浮かんだ場面である。「」は交通事故を起こした「心当たり」としてドカの顔を思い浮かべたのだが、それが「にこやかな笑顔」だったので「こういうときにかぎって」と感じたのである。

**問二**　「入学以来の無無欠席記録」を保持していたドカが欠席したので、「僕」は、やはりゆうべの交通事故を起こしたのはドカだったのではないかと感じている。「ドカが事故を起こしたと決まったわけではない」というもやもやした気持ちがあるために、ドカの他にも欠席者がいないか、つまりドカの他にもゆうべの交通事故を起こしたと考えられる人物がいないかを確かめたくなったのである。

**問三**　直後に「理由はよくわからない」とあるので、「なんとなくうれしかった」理由自体は「僕」自身にも説明がつかない気持ちである。ただし、そのあと続けて、「もしも職員室のドアを開けた、他の先生たちとおしゃべりしているジン先生を見たら、そのまま引き上げてしまったかも」とあることから、「僕」の中には、ジン先生に他の先生たちとは違った存在であってほしいと感じている気持ちがあることが読み取れる。それに当てはまるのは**イ**である。

**問四**「」は、不思議で納得がいかないこと。こうした意味を知らなくても、「うん？」と「僕」を見ているジン先生の様子から、何か疑問を感じているということが読み取れる。**ア**は「怪訝」の意味やジン先生の様子に合っている。**イ**は「何かたくらみがあるのか」というように生徒に疑いの目を向ける先生として、ジン先生はかれていないので、合わない。**ウ**は「思い通りにならず」とあるが、ジン先生が「僕」に対して何か思い通りにしようとした場面ではなく、したがってジン先生が「」になるわけもないので合わない。**エ**は「真実をごまかそうとして必死でいる」がこのあと特に隠そうとせずにドカの交通事故について話していることと合わない。**オ**は「怪訝」の意味ともジン先生の様子とも合わない。

**問五**　実際にジン先生の背中が大きく、分厚くなるわけではないので、これは「僕」にとってそう見えたということである。ドカのことを心配し、不安を感じていた「僕」は、ジン先生からをかれ「だいじょうぶだ、だいじょうぶ」と言ってもらったことで、ジン先生にたよりがいのようなものを感じたのである。それによって、「僕」の目に映るジン先生の姿が大きく分厚く見えたと考えられる。

**問六**　「僕」とヒコザは、交通事故を起こしたドカのことを心配していた。「べつにドカが百パーセント悪いってわけじゃない」というのは、そんな「僕」とヒコザにとって良いニュースなので、「僕」たちは安心したと考えられる。

**問七**　直後に「そう言われてあっさり引き下がるわけにはいかない」とあることに着目する。「そう」はジン先生の発言であり、それに対して「そう言われてあっさり引き下がるわけにはいかない」と感じた「僕」の反応が　Ｂ　ということになる。つまり、　Ｂ　に当てはまるのは「あっさり引き下がるわけにはいかない」気持ちを表すものということになる。それにするのは**イ**と**オ**だが、このあとで「特にヒコザは」とヒコザが「僕」よりも強く反論したことが示されており、その内容が「友だちにしかできないこともあるんじゃないですか？」なので、**オ**の「信用できません」というもっと激しく反論する内容は合わない。

**問八**　「めやまし」を言ったり「現実的に」なにかをしたりするわけではなく、「とにかく会いたい」という気持ちである。同じように、何かが具体的にできるわけではないがとにかく会いたいという気持ちが表されている部分をさがすと、「ダッシュでドカの家に向かいたかった。ドカに会いたい。ドカの顔を見て、にいてやりたい。」が見つかる。

**問九　ア**　「僕」がクラスの友だちであるドカのことを「に心配」していることは確かだが、「自分のことは二の次にして」といった内容は本文から読み取ることはできない。

**イ**　「僕」の「母」が交通事故について話題にし、「僕」に「誰か心当たりない？」とたずねているが、「をに……聞き出そうとする」といった様子ではなく、「」からたずねているというのは合わない。

**ウ**　「僕」がジン先生を訪ねたとき、ジン先生は職員室で他の先生たちの世間話に加わらずに指導書を読んでおり、悪そうにしてはいたが、「他の先生たちからはけむたがられており」といったことは読み取れないし、世間話に加わっていなかったのもいつものことかどうかもわからないので、「誰とも話をしない」というのは合わない。

**エ**　本文は確かに「僕」と母やジン先生、ヒコザとの会話が書かれたものだが、それぞれの相手に対する「僕」の気持ちが書かれているわけではないので合わない。

**オ**本文は「僕」の視点で展開しており、部③のように「うれしかった」などと書かれているところはあるが、そうした直接の心情表現は少なく、多くは「僕はりんだ」「ゆるんでいたネクタイをめ直した」「をんでうつむいた」などの言動やから心情を読み取るように書かれているので、合っている。

四　古文の読解

《出典》『物語集』

＊問題作成の都合上、表記を一部改変したところがある。

**問一**「かなしき」と読むが、用いられている漢字が「愛」であることと、「子多しとへども（子供が多いといえども）」ということから、大勢いる子供たちの中でも最も愛している子供だという意味であることを読み取る。

**問二**「ゑ」は現代仮名いの場合は「え」に直す。「を」は助詞なので、「お」に直さず、そのままにする。

**問三**の親は「来たりて我れを見るべし」と願っている。「見る」は「みとる。死に際に付きそう」という意味なので、これを願うときの表現でまとめる。

**問四**　直後に「」とあることに着目する。直前で、「をき」とあるので、けむりを出すのはである。

**問五**陽勝仙人がいるのは、「祖の家」の「屋の上」である。ａは「祖」、ｂは「家」にあたるが、ａは二字と指定されているので、「」をき出す。

**問六　ア**は「陽勝仙人が家を捨てて出ていったことで自らを責め」、**イ**は「くなりかけていた親を回復させた」という内容がないのでそれぞれ合わない。**ウ**は「仙人はいなくなっていた」のではなく、声だけが聞こえて姿は見えないということになっていたので合わない。**エ**は「もう二度とは来られない」とは言っておらず、逆に毎月来るということを言っているので合わない。**オ**は陽勝仙人が親に言った言葉と合っている。

〈現代語訳〉

　　陽勝仙人の親が、故郷で病気にかかって苦しんでいたが、親がなげいて言うには、「わたしは子供が多いといえども、陽勝仙人はその中でも最愛の子である。もし、わたしの心を知ったならば、来てわたしの死にに付きそってもらいたい」と。陽勝は、神通力をもってこのことを知って、親の家の上に飛んできて、をとなえた。ある人が（外に）出て屋根の上を見るが、声は聞こえるが姿かたちは見えない。仙人が親に申すには、「わたしは、永久に火宅の世界をはなれて人間界に来ることはないのですが、孝養のために無理に来て、経を読み言葉を交わすのです。毎月十八日に、香をたき花を散らしてわたしを待ってください。わたしは、香のけむりをたずねてここに下りてきて、経を読み仏法を説いて、父母の恩得を報じましょう」と言って、飛び去った。